

「僕もできる」

大和郡山市立片桐西幼稚園（奈良県大和郡山市）

[5 歳児]

忍者に“なる”ことから“ヒト”としての自分を見つめるA児

A児や周りの子どもの様子

- ・ A児はいろいろなことに興味をもち、不思議だと感じたことを試したり、考え工夫したりすることが好きな子どもである。しかし、自分ができないと思うことについては、失敗を恐れて取り組もうとしない姿が見られた。
- ・ 時の記念日を前に、園内の様々な時計に親しむ子どもたち。時計探検を楽しみ、オルゴール時計や鳩時計の面白さに気付く興味や関心をもつ。A児は「今、長い針が12 短い針が10」と、時計の針の動きに興味をもつ。次第に、A児は「長い針が6になったら片付け、30分になったらだね」と、時計の読み方にも興味をもつようになった。

事例

子どもの姿	A児の分析
その頃A児は、友達B児が始めた、忍者に“なる”遊びを楽しんでいた。5歳児が“なる”忍者は、登り棒を城の壁に見立て「棒登りの技」に挑んだり、縄で前跳びや走り跳びに挑戦する「縄の修行」を考えたりして取り組む。忍者頭巾や剣、手裏剣への興味よりも、体を鍛えることに意識をもち、忍者に“なる”ことを楽しんで「縄の修行」に挑めた。 「忍者のA君は縄の修行に励んでいるな」と思っている友達がいる。	自分でない忍者に“なる”ことで、自分が跳べないかも？と決めつけることなく友達(“ヒト”)と一緒に挑戦することができた。
友達のB児と一緒に忍者に“なる”ことで、縄の修行に励むA児。前跳びや走り跳びの技に挑むB児に続き、挑戦するA児であるが、上手く跳ぶことができない。A児は、前跳びや走り跳びの技に取り組むことをやめるが、	自分でない忍者に“なる”ことで、自分(“ヒト”としての)の姿を見る。できない自分(“ヒト”としての)を友達には知られたくない。
偶然回していた縄が、以前興味をもっていた時計の針と重なり、時計の針のように縄を回して友達に跳んでもらうという「時計跳びの技」を考え出す。新たな技「時計跳びの技」を考えたことで、意欲的に“忍者”になる遊びを続ける。 「忍者のA君、新しい技を考えたな」と思っている友達がいる。	時計の針に興味をもった経験が、偶然、縄を回したこととつながり、技が生まれた。
「時計跳びの技」を友達に知らせる。縄を回しながら相手の動きを見て、友達が跳ぶタイミングを計る。	自分が縄を回しながら、相手(“ヒト”)の動きを見て、相手(“ヒト”)とのタイミングを計る。
「時計跳びの技」は前跳びや走り跳びなどができない子も楽しむことができると知る。 相手とのタイミングを計り、回そうとするようになる。 「忍者のA君が考えた技は、僕もできる」と思っている友達がいる。 友達の姿から、自分の考えた技は、誰もが楽しめることを知る。	自分(“ヒト”としての)と同じように、跳べない友達(“ヒト”)も楽しめることを、友達(“ヒト”)の姿から知る。
5歳児が二人組になって「時計跳びの技」を楽しむ姿を見ている3歳児が、友達と二人組で模倣しようとする。上手くできない3歳児を見て、5歳児が縄を回すことを提案する。 「忍者のA君は、私が跳べるように縄を回してくれた」と思っ喜び3歳児がいる。	以前のできない自分(“ヒト”としての)の姿を3歳児の姿に重ねて見る。
「時計跳びの技」で自信を得たA児は、忍者に“なる”中で、友達の忍者が前跳びや、走り跳びをする姿を見て挑戦し、できるようになる。	認められた自分(“ヒト”としての)を自信とし、友達(“ヒト”)の姿をモデルとする。



みどころ

A児は親しい友達と縄跳びをすることで“できない自分”を感じますが、忍者になっていることで「時計跳びの技」を見付けだし、新たに人とかかわりが生まれています。「科学する心」が躍動し観察や思いやるかかわりが引き出され、相手の跳ぶタイミングに合わせて縄を回すという技ができるようになりました。「相手に合わせて回せば3歳児にもできるから、5歳児が縄を回す」という工夫が遊びの提案につながりました。